

## 近代旅行記の中のイタリア

西洋文化移入のもう一つのかたち

本書は、明治から昭和二十年の間に刊行された旅行記や紀行文の中からイタリア旅行の記述を集め、「第一部 イタリア諸都市を歴訪する日本人たちの足跡」、「第二部 イタリア諸都市の観光スポット今昔」と分けて紹介し、考察を加えたものである。

著者の専攻は日本近代文学で、西洋文化との関連で言うなら、共著『言語都市・パリ』『言語都市・ベルリン』『言語都市・ロンドン』（すべて藤原書店）という仕事がある。今回、単著でイタリアを取り上げたのは、これら大都市をめぐる仕事ではカバールしきれない領域を見出したしからである。本書の副題である「西洋文化移入のもう一つのかたち」が、その領域を指している。ではその「もう一つのかたち」とは何か。イタリアは、今も昔も人氣のある観光地だ。美しい街並、遺跡や古美術の数々、壮麗な寺院、おいしい料理、オペラ等々、数えきれない魅力を持つ。ローマ、フィ

# 先人の足跡を参考に

興味のあるところが違えば、  
見える風景も変わってくる

宮内 淳子

リン、パリ等へと向かう人々を乗せた船は、途中イタリアに寄港した。そのため旅行記にはよく登場しているが、そこは最終目的地ではなく通過点に過ぎない。保養や古美術鑑賞のための

イタリア小旅行を含めて、いずれも記述は断片的で、行業気分が目立つ。だが、著者はこうした記述を無視しない。肩肘張らないものだけに、ここにはのびやかな感性が見られる。また、本音も出る。無意識の呼吸にこそ、異文化受容のもう一つのかたちが見られるはず、と著者は考える。

たとえば、食べ物。今は日本人の食生活に溶け込んでいるイタリア料理であるが、当時の日本人には新しい出会いであった（第二部第三章「日本人が、見て、食べて、飲んだイタリア」）。彼らが食文化の違いをどう受け止め、どう表現しようとしたか——こうした指摘と分析は、『食通小説の記号学』（双文社、二〇〇七年）を刊行している著者の得意分野である。

長期滞在でない旅では、観光地をまわる時の手段が旅の良し悪しを決める大きなポイントとなる。第二部では、日本人が訪れた観光地や代表的ホテル、美食の店を紹介する。また、トーマス・クック社、旅行ガイド本「ベデカー」から、ナポリ在住で日本人のガイドを買って出るアントニオという個人まで、旅行を円滑に行なわせるさまざまな手段に目配りがなされている。ガイドブックの記述に

よって、あらかじめ旅のルートや土地の印象が決められてしまつこともあった。旅行記の内容にまで影響を与える場合があるのだから、ガイド本の検証も大切だ。

更に「もう一つのかたち」を示す大きな特徴として、取り上げられた旅行記や紀行文の書き手の多様さがある。旅行記や紀行文は、従来、作家や学者のものが多く紹介されてきた。本書にも夏目漱石、野上弥生子、横光利一といった文

学者はいるが、他に、実業家、官僚、政治家、画家とさまざまなタイプの書き手が取り上げられて、その数は文学者をはるかに凌ぐ。たとえば、「実業家にとつては、旅もまた『実業』であった」というような著者のコメントにあるように、興味のあるところが違えば、見える風景も変わっていく。著者は、各人が見るイタリアの風景を一緒に愛でたり、思いがけない感想を面白がったりしている。

イタリアの旅を思う人は、各旅行記に載っている目次がここに引用されているので、そのルートを辿り、先人の足跡を参考にしてみるのが一興であろう。（みやうち・じゅんこ氏「帝塚山学院大学教授・日本近代文学専攻」）

★しんどう・まさひろ氏は同志社大学教授。著書に「永井荷風・音楽の流れる空間」「ベストセラ

ーのゆくと」「食通小説の記号学」ほか。一九六二（昭和37）年生。



近代旅行記の中の  
イタリア

真鍋正宏著

四六判・301頁・2940円  
学術出版会 発行  
日本図書センター 発売  
978-4-284-10352-7